
 学 会 記 事

第 70 回新潟画像医学研究会

日 時 平成 27 年 11 月 14 日 (土)
午後 3 時～

会 場 ホテルラングウッド新潟 4 階
「越後西の間」

I. 一 般 演 題

1 脳血管疾患における 4D-CT Angiography の有用性

中村 公彦・温 城太郎・谷口 禎規
竹内 茂和

長岡中央総合病院脳神経外科

【はじめに】320 列 Multi Detector CT では、被写体の移動なしに上下 16cm の撮像が可能であり、従来の 3D-CT Angiography (CTA) に時間軸を加えた 4D-CTA も可能となった。今回脳血管疾患の臨床にどのように役立っているかを提示する。

【症例 1】右前頭葉脳動静脈奇形の症例では、nidus への流入血管の判別が可能であった。任意の角度から MIP や Volume Rendering 画像が作成でき、手術前評価に有用であった。

【症例 2】右横静脈洞部硬膜動静脈瘻の症例では、動脈相にて右横静脈洞が描出され、続いて左横静脈洞、上矢状洞が描出されたことで硬膜動静脈瘻の診断に至った。

【考察】4D-CTA では血流動態評価が可能であり、動静脈奇形や動静脈瘻の診断が可能であった。また動脈相と静脈相の画像を個別に作成できることで、手術シミュレーションとしても有用であった。

【結語】4D-CTA は脳血管疾患の血流動態評価

に有用であり、症例によっては脳血管撮影に代わり得ると考えられた。

2 白血病治療の 15 年後に頭部 MRI で多発性海綿状血管腫を指摘された 1 例

山口 貴博・梅田 能生・坪口晋太郎
若杉 尚宏・梅田麻衣子・小宅 睦郎
藤田 信也

長岡赤十字病院神経内科

症例は 54 歳、男性。14 年前に慢性骨髄性白血病急性転化にて骨髄移植施行された。また、糖尿病性腎症にて血液透析導入予定だった。1 年前に頭部 MRI で異常を指摘された。半年前頃から認知機能低下と歩行障害が出現し、頭部 MRI 所見も悪化したため入院した。HDS-R 21/30 点と軽度低下し、全体に動作緩慢だった。血液検査で高度の腎機能障害を認め、頭部 MRI では白質病変と多発性の T2 * 低信号病変を認めた。

【考察】認知機能障害と動作緩慢は血液透析で改善したため尿毒症による症状と考えた。白質病変と T2 * 低信号病変については、骨髄移植時に全脳照射を行っていることから、全脳照射に関連する多発海綿状血管腫と白質脳症と考えた。既報では、全脳照射後に骨髄移植を行った 68 人中 28 人に海綿状血管腫が出現したとの報告があり、その出現時期は照射後 10 年頃からで、照射量が多いほど出現率が高く、多発例が多くなると報告されている。この海綿状血管腫の発見には、MRI の T2 * や SWI が有用である。